

釣り人だから見えてくる
北海道の今

川や海や湖に溢れる機会が多い釣り人は、
動物園たらのみに「環境の変化」
を感じている存在なのかもしれない。
だが、その「環境変化」は、
今、私たちの生活にどう影響を……

天竺山自然ヤマメの危機 美溪を寸断する サンルダム計画

「コンクリートで固める河川改修の時代は終わった」、「ダムはもういらぬ」……。

こんな言葉がごく自然に聞かれるようになった昨今、
新たに巨大なダムを建設する動きが進んでいる。
予定地の天塩川水系・サンル川は、天然のヤマメが棲む美流。
もし、ダムができれば、サクラマスの上流はダムに拒まれ、
この川の本流は激減してしまうだろう。
時代の流れに逆行していると思えるこの事業に、
妥当な建設意義はあるのだろうか？



サンル川にはヤマメが豊富。しかし、ダムが完成すれば影響は必至(写真=編集部)

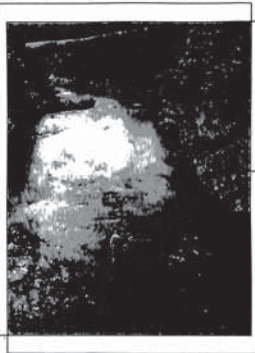
写真文 滝川康治
（サンルダム建設を考慮する前）実行委員会事務局員 北ポロイター下川町在住



像の森公園展望台から望むサンル川下流部



堤体予定地の試掘トンネルの内部。
ハンマーで叩くと崩れ落ちる岩も



水没予定地のサンル川。夏になると釣り人の姿が目立つ

下 川町市街地の北にある「象の鼻公園」の展望台。ここからは、サンル川の下流部が一望できる。

道道下川…雄武線に沿った山裾には、ナラやハルニレ、カツラなどの天然林が広がり、山頂部にかけてトマツやカラマツの人工林が多い。平坦部には農地が開け、森と畑を縫ってサンル川が流れる。火山岩地帯をおおう森をくぐり抜けたサンル川は、大雨が降っても長く濁ることはなく、清冽そのものの川である。

天塩川水系で2番目の直轄ダムとなるサンルダム計画は、この展望台のそばでサンル川をせき止める、総貯水量7300万トンの重形式コンクリートによるもの。

地元と国の波長が一致して…

北海道開発局の手によって、すでに用地測量や環境調査、工事用道路の造成などが行なわれてきた。

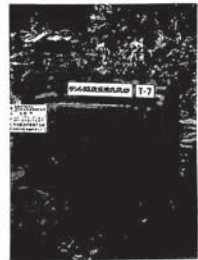
ダムの堤体予定地付近には、長さ50mのトンネル「試掘」が1本掘られている。わたしたち坑内を見学したことがあるが、強固な一枚岩盤はなく、水を透しやすい地盤が多かった。

「こんな地盤で大丈夫なのかと仕事仲間の話題になったもんです。ハンマーで叩くと、ポロポロと崩れてくる」ともあった。堤体予定地やダムの型式も変わったりして、不安があります。

そう話すのは、このトンネルの掘削に携わった経験がある、町内住の元鉱山員橋本玉吉さん(仮)だ。開発局は「表面の悪い地盤はき取り、水を透しやすい

ところには凝固剤を注入するので、安全なダムを造ることができると言うが、橋本さんの心配は消えない。
サンルダム計画が替場したのは、いまから30数年も前にさかのぼる。初年代後半にはボーリング調査が行われたものの、地盤上の理由から名寄川本流の奥名寄地区に調査地点を移してしまう。そして、いつしかサンルダムは住民の話題にのぼらなくなつた。

開発局がサンル地区で調査を再開するのは、84年のこと。そのころの下川町は、下川鉱山の休山や営林署の統廃合、名寄本線の廃止など、一気に過疎化が進行す



堤体予定地付近には、すでに7本の試掘トンネルが掘られている

る問題を抱えていた。事実上、休眠状態にあったダム計画が再浮上したのは、「ダム景観で地域の活性化を」と夢を描く地元自治体と、2つ目の直轄ダムをつくらうとする開発局の波長が合つてのことらしい。

「88年度から4年間にわたって、ダム建設を前提にした『実施計画調査』が行なわれた。そして、95年にはサンルダムの基本計画が官報に告示され、建設準備が進んでいった。

「ダムで活性化を」の夢物語が声高に語られたこと、「国のカネでやる話なので関係ない」という意識、国側からの情報提供の不十分さ…などがあり、住民の関心は盛り上りに欠けていた。
94年に発表された環境アセスメントに対し、下川自然を考える会から、工事に伴うクマゲラへの影響を心配する声や、ダムに魚道を設置してサクラマスを遡上させるよう求める要望などが出された。しかし、そうした声も、ダム建設を根本から見直す動きにはならなかった。

効果之しく「無用の長物」か

高さ55m、堤頂の長さ375mのサウルダムは、湛水面積が450ヘクタールと北海道でも有数の規模になる。総事業費は530億円。2008年の完成という、とりあえずの目標はある。13戸が暮らす水没予定地の買収に向けた作業も、本年度から具体化している。が、公共事業費の削減や全国的なダム見直しの動きなどもあって、本体着工のメドはついていない。10年後の完成目標について、開発局も「無理ではないか」と認める。計画から40年たっても完成できないダム——それがこの事業だ。

サウルダムの最大の建設目的は天塩川流域の洪水調節で、ほかに「水道用水の確保（発電）」「流水の正常な機能の維持」が挙げられている。流域人口は約9万8000人（13市町村の合計）と少なく、下流では大きな水需要が見いだせない。かかがい、工業用水の確保」といった目的はない。

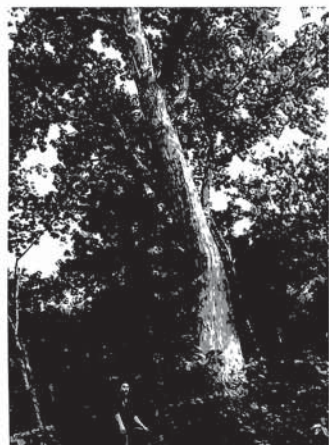
ひとつづつ目的を検証してみよう。100年に1回の大水——こうしつと言いがよくされる。ものすごい洪水のように聞こえるが、81年8月に起きたのが「100年に1回」レベルの洪水と言っから、すでに体験済みである。このときは、天塩川の上・中流域で200〜300mmの雨量（3日間）を記録し、水害も各地で発生した。

ダムは洪水時のピーク流量をカットする設計になっている。誤解している人が

多いが、ダムは「洪水調節」をする装置であって、国は「水害をなくす」とは言っていない。洪水時に水位を下げられるなら「調節効果がある」と言うわけ。なんだかやこしい話だ。

開発局のパンフを見ると、「100年に1回」の洪水を想定した流量調節図があるが、具体的なイメージはわからない。別項に分かりやすい図がある。81年の洪水時にサウルダムがあったら、下流でどれだけの水位が下がったかを、開発局の試算をもとに描いたものだ。名寄市真敷別では約20cm、中川町豊草では約10cm、それぞれ水位を下げられたという結果である（1〜2mといったレベルの話ではない）。

新しい河川法では、川を整備するとき、自治体や住民の意見を反映させる案項が盛り込まれた。こうした「調節効果」にしても、数字を吟味し、「ダムが必要かどうか」を決めるのは、国ではなく、流域の住民や自治体になったわけだ。時代は変わっている。具体的なデータをもとに、ひとつひとつがダムの効果や必要



サウル川流域の豊かな森は、「緑のダム」としての機能を果たしている。こんな巨木も珍しい

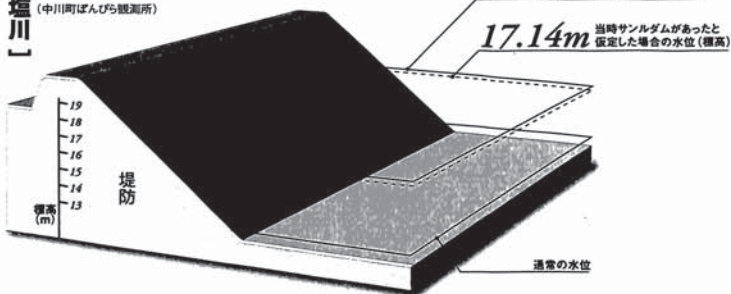
性を問い直してみてもどうだろうか。

天塩川流域では、戦後盛んに行なわれた築堤や河道の掘削、浚渫、護岸などの治水工事によって、洪水による被害は激減している。55（昭和30）年を最後に、水害による死者も出ていない。今では「もう水害の心配はなくなった」と感じている流域住民も多い。

天塩川と音威子府川の合流部付近のように、時おり水害に見舞われる地域が残るが、65kmも上流にサウルダムを造っても、この水害は解消できない。こうした場所は、ダム以外のきめ細かな手当てのほうが効果を発揮できる。地域の事情に応じた対策、そつ切なのだ。サウルダムには「水道用水の確保」という目的もある。ダム事業に参加すると、名寄市と下川町合わせて、新たに4230トン/日（毎秒49リットル）の水道用水の水利権が確保される仕組みだ。この「4230トン」という数字は、同じく大規模の大雪山ダムや定山ダムと比べると、1〜2桁も少ない。いずれの町も人口が減っていて、需要

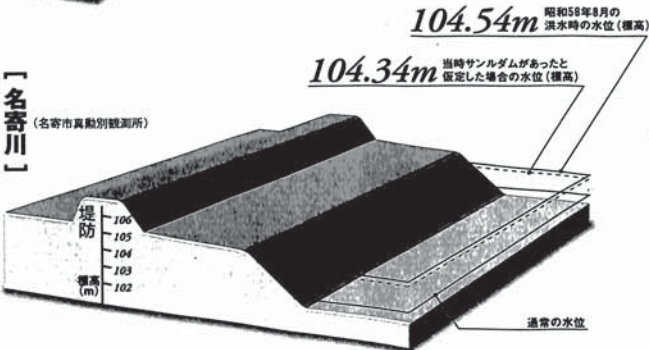
「天塩川」

（中川町ばんびら観測所）



「名寄川」

（名寄市真敷別観測所）



想定には見直しの余地がある。かんがえる。工業用水との水利権の調整もできる。わずかな水利権なので、ダム以外の代替策はいくらでも考えられる。

「発電」の目的もあるが、サウル発電所の最大出力は1400キロワットと、道内の直轄ダムでは最小の規模になる。この程度の電力のために大きなダムを造るのは、経済的なメリットが乏しい。

「流水の正常な機能の維持」という、あまり耳慣れない言葉も出てくる。ダムから一定量の水を流すことで、川の機能を保つための目的らしい。

が、いままでも流域の住民から、「ダムで流水を正常に」との要望は聞いたことがない。むしろ、「川の水量は変化があるが自然、それが正常な姿だ」といった声は耳にする。こちらのほうが常識的な感覚だろう。そう考えると、この目的も付け足しの印象が強い。

4つの目的も、事業効果の乏しいものが多く、治水や水道水の確保には代替手段もある。代案の検討をせずにサウルダムを建設すると、無用の長物になってしまわないだろうか？

地元釣り人が語る

サウル川

守りたい自然のサイクル

文◎宮田 修（下川町在住）

サウル川流域は、道内でも有数のヤマメ釣り場として親しまれている。豊かな森林と多くの沢に恵まれた川は、毎年私たちが釣り人を迎え入れ、心身共に満足させてくれる。この川はヤマメ、流域住民に豊かな自然と季節感を運ぶ象徴でもあり、大切なことのない自然と釣り人の関係がここにはある。流域の多くの沢には、ほとんど護岸や防ダムがない。その背後にある豊かな森林が、治水の役割を果たしているのだ。

春の冷たい雪が溶け、河川の天塩川から遡上するサウル川。その距離はサウル川最上流部まで約200kmにもなり、途中、日本海へ降海する鯉毛ヤマメと交差する。互いに助長し合っていることだろう。このように、サウル川に生まれたサウルマスは、その一生のうち、天塩川水系で400kmの旅をし、自然産卵を繰り返している。国内ではまれに存在と言えよう。しかし、ダムができれば、この自然のサイクルが絶たれてしまう。

いつまでも、サウル川と流域の豊かな生態系が保たれ、それに感謝しながら釣りを楽しみたいと思っっている。そのため、今、私たちに求められているのは、この豊かな自然をいかに次世代に引き継ぐかを考え、行動していくことではないだろうか。

昨年、河川法が改正された。「漂流元年」は私たちが自ら学び、調べ、行動して開かれる。建設費の少ないダムへの巨額の国費投入は、いち国民として阻止すべきではないだろうか。

地域振興の夢消えた岩尾内ダム

隣の朝日町にある岩尾内ダムは、71年(昭和46)年に完成した。天塩川水系では最初の多目的ダム。完成から四半世紀が経過した今、岩尾内ダムによる地域への影響をみると、サンルダムの将来の姿が予測できそう。

日本のダム事業は、国や都道府県がたてた計画に基づいて建設されるのが通例だが、岩尾内ダムはかなり違っていた。ここは、電源開発に期待する地元自治体の誘致運動の末に建設が決まるといって、特異な経過をたどったダムだった。その運動は13年間におよび、中央の政府側で建設が決まった——と、60年代の新聞記事は伝えている。

「かんがい排水事業が行き渡り、周辺地帯は飛躍的に伸びる。市街地人口も膨張して7万人、士別を中心に豊かな町になるだろう」(筆者注)当時の士別市の人口は3万7000人あまり。



秋になるとほとんど水が流れない、岩尾内ダム直下の天塩川



町と議会の代表を招いて開いた住民グループ主催の討論会(96年12月)

新河川法のもと代案の議論を

'96年夏、下川町内にダム建設を問うたおす住民グループが誕生した。メンバーは10人ほど。私もこのグループの一員である。ハガキでダムに対する意見を求めた。町民アンケートを切り、町や議会の代表をハガキで呼び寄せて、討論会、町議との懇談会、現地調査、開発局との話し合い、など、地道な活動を繰り返してきた。

わたしたちは今年5月、「サンルダムに代わる公共投資について——天塩川水系の治水整備案」と題するレポートをまとめた。天塩川流域の現状を踏まえて、①これらの公共投資のあり方、②きめ細かな治水対策、③森林の保水機能、④

地方紙の座談会(96年)のなかで、当時の士別市長がこんな夢を語っている。「ダムは地域開発の起爆剤になる」。

そう信じられていた時代があった。現実には崩壊していった。かんがい事業によって農業基盤が整備されたり、電力の安定供給につながるなど、一定の効果はあったものの、ダムが完成しても人口は減り続けた。とりわけ朝日町では、ダム建設によって過疎化が一気に進んだ。岩尾内ダムを訪れる人のなかで、173戸の集落が丸ごと湖底に沈んだ歴史を知る人はあまりいないだろう。その集落、さらにその奥の30戸も含め、1000人あまりが土地を離れ、多くの人が町を出たという。現在、朝日町の人口は2000人あまりで、ダム建設前の3分の1に過ぎない。人口減には別の要因もあったが、ダムは過疎化を加速させてしまった。

利用者をみかけたことがない立派なテニスコートや、昨年で廃棄した温泉ホテルなどが、ダム湖の周りに目につく。キャンプ場は人気があるようだが、利用は無料なので地元にお金は落ちない。ダム観光が地域振興に役立っているようすは見られず、町役場では「観光による経済効果は計算したことがない」と話す。それでも、発電所関係の交付金などで町の財政は助かっている。これは朝日町の現実である。

では、サンルダムはどうなるのか? 農地や森林が減る、人口流出を招く、サクラマスが遡る川が分断される、川の生態系が変わる——といった損失に

別の地域振興案——の4つについて、流域の自治体や開発局などに代替案を提案したものだ。その一部を紹介してみたいと思う。

①これからの公共投資
30年あまり前に立案されたサンルダム事業に象徴される、巨大な施設づくりではなく、きめ細かな施策を積み重ねること。「水」を中心に、「経済や環境をよくなるための投資」へと転換してはどうだろうか。

たとえば、酪農の規模拡大に伴う糞尿対策のための河畔林の整備や、堆肥化による土壌還元、中・下流域に点在する三日月湖(天塩川の旧河川)の水質浄化、

薄れた農薬用取水堰の撤去、魚道の設置などに投資してはどうか。

②きめ細かな治水対策
天塩川と音威子府川の合流部付近の早急な手当て(道路の付け替えや堤防の整備、浸水農地の補償など)、名寄市智恵水地区などの内水氾濫対策、洪水調節や濁水処理などの役割がある森林の整備、遊水地づくりの検討などをやってみてはどうか。

③森林の保水機能
森林の保水容量についての研究結果をもとに試算すると、天塩川流域の森林土壌全体では8億トン以上(サンル川流域だけで4000万トン程度)の水を一時的に貯められる。サンルダムの有効

貯水量は6600万トンなので、森林の保水容量の大きさがよく分かる。'54(昭和29)年の洞爺丸台風による倒木の発生で大きな被害を受けたこの地方の森林は、その後の植林などで保水機能を回復しつつある。

また、天塩川流域の年降水量(雪も含む)は1000mm前後と、国内では少ない部類に入る。

道内でも有数の積雪があるこの流域では、「雪のダム」の役割も見逃せない。夏は、緑のダム、冬は、雪のダム、の機能が備わっている。このダムは、多額の建設費がからず、適切な森林管理をしていけば低コストで維持できる。

だから、いま以上の人工ダムが必要理由は何ひとつない。これからは、流域の自然環境を活かした、「四季を通じて、森林が水をしっかりと受け止め、ゆつくりと流す」という治水対策に、住民と自治体、国が力を合わせたい。

④別の地域振興策について
ダム予定地のサンルの魅力は、市街地に近いところに豊かな森林と清流があること。こうした環境を活かした振興策によって、天塩川流域とオホーツク海側とを結び保業や産業、文化などの中心地になる可能性を秘めている。

山々や川と親しみながら、遊び、学べるように、サンル川流域全体を「森と水の生態系公園」にしてはどうか。平地には、天塩川流域の淡水魚のすべてが分かる観察施設やサクラマ

加えて、観光に期待できないことは岩尾内ダムの例でも明らかだ。そのうえ、発電規模が小さいので交付金は少額で、町の財政に寄与するものもあまりない。地元にとって、ほとんどメリットのない公共事業になるであろう。

地元釣りが語る
サンル川

豊かな流れを子供たちの世代にも

文◎金森 章(下川町在住)

サンル川は水生昆虫が豊富な川だ。ヒラタカゲロウ、ヒゲナガカワトビケラを中心、実に多種多様な水生昆虫が生息している。もちろん、それらの恩恵を受ける魚たちも豊富だ。ダムなどが存在しない流れにはサクラマスが自然産卵できる状況が多く、美しい天然ヤマメが多数生息している。

ヒラタカゲロウから始まるハッチを追いかけ、8月1日の解禁日から秋まで、川の四季を満喫しながら釣り下っている。サンル川のヤマメは、私のような「ハボフライフィッシャー」のフライも時々くわえてくれる。ありがたい存在だ。自分自身、けっこうな年(7)になり、時々、「年と何年、フライフィッシングを楽しめるだろう」と考えたこともする。しかし、古里の川であるサンル川、名寄川には、いつまでもヤマメやジマスタたちがあふれていてほしい。そして、自分の子供たち、その子供たちの世代にも、そんな環境が残っていてほしいと願っている。

スの養殖場、大きな池をもつ公園などを含んだ拠点施設があってもいい。

「森の部」で栄えた地域性を活かして、森林に関するすべてを学べる人材養成の場を創設してもいい。

天塩川の要所には、助けた人々がくつろぎ、カヌーや釣り、散策、キャンプなどを通じて自然に親しめるような「川の港(駅)」をつくってはどうか(三日月湖も活用できる)。

また、自然の状態でチョウザメが復活可能な川は、日本では天塩川をいっていない。上流の森林整備や水質浄化策とうまく組み合わせながら、チョウザメが生息できる深い淵を造成する——といった、新たな公共投資を試みてはどうか。

こんな提案だ。開発局にも真剣に検討してもらえれば、と思っっている。

新しい河川法は、「川は国民がオーナー、国は管理を任されたものだけ」という精神を明確にした。これまでの治水と利水の役割に「環境」を加え、「住民参加」も盛った。ダムに象徴される、川をコンクリートで固める手法は過去のものになりつつある。

法は改正されても、行政の意識が変わるには時間がかかるだろう。川の管理を行政に委ねてきた、住民側の他人任せの意識も変えることが大切だ。

川や釣りを愛する人たちも、もっとダム問題に関心をもち、発言して欲しい。

「川は国民がオーナーなのだから……」